

名作再読、拾い読み(1)

『赤死病の仮面』("The Masque of the Red Death") 小澤 文彦

以前に読んだことがあるアメリカの作家・詩人であるエドガー・アラン・ポオ(Edgar Allan Poe, 1809)の短編小説を再読してみました。ストーリーも結末も分かっているのですが、それでもまた興味深く読み進んでいくことができました。『黒猫』、『モルグ街の殺人』、『盗まれた手紙』、『アッシャー家の崩壊』、『黄金虫』など読んでみて、以前に感じたと同じような感想を持ったり、その時は気付かなかった部分に別な興味が湧いたりして、結構楽しむことができました。中でも前回同様強烈な印象を受けたのが、『赤死病の仮面』です。色違いの7つの続き部屋で仮面舞踏会が開かれます。スタンドグラスを通して篝火の明かりが各部屋の中をゆらゆら照らし出します。ワルツを踊る人々の色と形が揺れ動く様は色彩の洪水とも言えるでしょう。大きな柱時計の音が鳴り響き、踊りの動きが止まります。その時、全身真っ赤な扮装の人物に人々が気付きます。キビキビしたテンポでストーリーが展開し、あっという間にクライマックスに到達。色彩が氾濫し、豪華絢爛たる雰囲気の中に不気味さが漂う、この「恐怖の美」の世界には、心を捉えて離さないものがあります。

(あらすじ)

「赤死病」という疫病がかなり以前から猛威を振るっていた。激痛と眩暈を伴い、毛穴から大量に出血して死に至るといのだが、感染してから30分以内に死んでしまうという恐ろしい疫病である。プロスペロ公(Prince Prospero)は領内の人口が半減すると、宮廷の騎士や貴婦人の中から健康で快活な人を千人ばかり選び、彼等を引き連れて城砦風に造られた僧院に引き籠もってしまった。高く堅牢な壁が周囲を取り巻いていたが、壁にある幾つかの鉄の門は、内側から嚴重に塞いで出入りを完全に遮断してしまった。

籠城して5、6ヵ月たった頃、プロスペロ公は仮面舞踏会を催すことにした。会場は、7つの部屋が続いている場所だったが、公の怪奇趣味から、不規則に配置されているため互いに見通しがきかない構造だった。部屋の窓は縦長で幅の狭いゴシック風。スタンドグラスが嵌めてあったが、窓ガラスの色は、各部屋の装飾の基調色に合わせて、東の部屋から順に、青、紫、緑、オレンジ、白、堇色となっていた。西端にある7番目の部屋は黒ビロードのタペストリー、黒いカーペットと黒づくしだったが、窓ガラスの色は部屋の装飾と一致せず緋色、つまり濃い血の色だった。各部屋の内部には、夥しい金色に輝く装飾品があちこちに散在していたのだが、ランプや燭台は一つもなく、各部屋に沿ってめぐる回廊の窓のところに篝火が焚かれていた。その明かりがスタンドグラス越しに室内を照らしていて、あでやかで夢幻的な世界をつくりだしていた。

集まった人々の仮装は、公の趣向に合わせてグロテスクで、けばけばしく、きらびやかであり、美しいものや奇異なものの中に、恐怖や嫌悪感を与えるものまであった。

黒の間にある黒檀の大きな柱時計が真夜中の十二時を告げ始めた時、人々は初めて背高く、痩せこけていて全身真っ赤な扮装の人物に気付くのである。その人物はワルツを踊る人びとの間をゆっくりといかめしい足取りで歩き回っていた。物事には限度というものがある筈だとプロスペロ公は激怒し、捕らえて仮面をはぎ取れと絶叫する。恐怖のあまり大勢の者は手出しできない。相手は威厳に満ちた歩調で青の間から紫の間、緑の間、オレンジの間、白の間、堇色の間へと進んで行く。プロスペロ公は走って追いかけて、黒の間ですぐ後ろまで追った。対峙する二人。短剣がキラリときらめいて黒いカーペットの上に落ち、その上に倒れ込んで息絶えたのはプロスペロ公。人々が黒の間になだれ込み、仮装の人物につかみかかって仮面と扮装を引きはがしてみると中は空っぽ。「赤死病」そのものだと気付いて人々はバタバタと倒れてゆく。

あらすじは以上の通りですが、日本語で読んだ後、もし興味が湧いたら是非とも原文(約6ページ)で読むことをお勧めしたいと思います。日本語訳と対照的に読むとリズムカルな英語の響きが伝わって来て、格別な味わいがあります。結末の英文とその訳文は次の通りです。

And now was acknowledged the presence of the Red Death. He had come like a thief in the night. One by one dropped the revellers in the blood-bedewed halls of their revel, and died each in the posture of his fall. And the life of the ebony clock went out with that of the last of the tripods expired. And Darkness and Decay and the Red Death held illimitable dominion over all. (今や、「赤死病」が侵入してきたことは誰の目にも明かだった。それは夜盗のように潜入してきたのだった。宴の人びとは一人また一人と彼らの歓楽の殿堂の血濡れた床にくずれ落ち、その絶望的な姿勢のまま息絶えていった。そして黒檀の時計の命脈も、陽気に浮かれていた連中の最後の者の死とともに尽きた。三脚台の焰も消えた。あとは暗黒と荒廃と「赤死病」があらゆるものの上に無限の支配権を揮うばかりだった。)(*)

注(*1) *Selected poetry and prose of Poe* (Modern Library, 1951) p.231

(*2) 黄金虫・アッシャー家の崩壊 他九篇』八木敏雄訳(岩波書店, 2006) p.235